様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３９７３

研究課題名（和文）災害レジリエンスを高める歴史学習の開発研究

研究課題名（英文）Development of History Learning for Disaster Resilience

研究代表者
山内　敏男（Yamauchi, Toshio）

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：７０７８３９４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：繰り返される災害や戦争（以下厄災）について，これまで開発されてきた学習は正しいとされる知識や技能，態度を身につけることを求め，近代合理主義的な知識や判断が取り上げられる傾向にある点，価値判断内容が同質であることを強いてきた点に課題があったことを明らかにした。
これらの課題を解決する学習として，①現代社会において個人や社会に潜んでいる常識を意図的に過去にあてはめることで，現代社会の規範を問い直す資質・能力を育成する学習，②厄災発生時に陥りやすい事が実際に起きることを前提とした学習，③厄災の記憶のされ方・語られ方の変遷を学に自らが語りを形成する能力を育成する授業の開発と学習の方向性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
一般にレジリエンスは「ハード面の強靱化，リスク対応や意思決定，行動化にかかわる的確な判断能力の育成」を目指すのが穏当であろう。一方，従来厄災を扱った歴史学習では，厄災下における状況理解，あるいは望ましいとされる理想・理念が先行した態度育成に重点が置かれてきた。それに対して本研究では，よいとされる認識や判断を問い直し，自らが災害や戦争などの厄災を語り直すという行為を通して，自己や社会がどうあるべきか，どう行動するべきかを①問い直す，②語り直すことにより，社会をよりよくしようとする行動選択，つまりレジリエンスを高めた社会への参画，市民性形成が期待できる。

研究成果の概要（英文）：The study of recurring disasters and wars (hereafter referred to as "calamities") has revealed that there are issues in that the learning developed so far has sought to acquire knowledge, skills, and attitudes that are considered correct, has tended to focus on modern rationalistic knowledge and judgment, and has forced the content of value judgments to be homogeneous.
To solve these problems, we developed three approaches: (1) learning to acquire the qualities and abilities to question the norms of modern society by intentionally applying common sense latent in individuals and society to the past, (2) learning based on the assumption that what tends to happen when a calamity occurs actually happens, and (3) learning to form one's learning to form one's own story based on memories of the calamity and changes in the way the story is told.

研究分野：社会科教育

キーワード：歴史学習　学ぶ意味　教訓・知恵　バイアス　語り　語り直し　歴史の内在化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

災害の発生に備え建物の耐震化等のハード面における防災対策の強化とともに，リスク対応や意思決定，行動化にかかわる的確な判断，意思決定や行動選択，参画の資質・能力の育成は我が国にとって喫緊の課題である。社会の一員として他の人々や集団，地域の安全に関与する人材を育成するために，各々が最善策を判断，意思決定し，問題解決できる学習が重要である。本研究で着目するのは，災害は「時代そのものを炙りだす」事象であり（中元, 2006), 教訓･知恵を学ぶことが現在の社会行動への示唆を導く（バートンら 2015）という点である。歴史学習において歴史を教えること，学ぶことは自明視，所与のものとされ，教え，学ぶ教育的意義まで論じられていないという課題（渡部，2017）に対する答えの一つとして，歴史災害とその対応（本研究を進めていく中で，自然災害に限定せず戦争などの社会秩序の混乱を取り上げ「厄災」として内容開発の対象とした）から時代の特質と課題を炙り出し，判断，意思決定を行うこと，すなわち社会の在り方の構想，提案する学習過程は歴史学習の充実に寄与する可能性を有している。そこで，本研究ではこれまでに起きた歴史災害を分析し，これから起き得る被害や影響を説明したり，現代社会の在り方を議論したりする力を養う学習を開発，実践することが重点化すべき課題である（山内 2019）と考えた。

２．研究の目的

先行研究分析から，防災学習の典型は，合理的で正しい知識やあるべき社会の正解を求める傾向にあることが明らかとなった。しかし，災害は想定通りに生じ，個々人や社会に影響を与えるものではない。加えて人は必ずしも「正しい知識，判断」に基づいて行動しているわけではない（山内 2021)。例えば災害に接したとき人は「先入観にとらわれ，異常事態でも『正常の範囲』と誤認し，対応を誤る心理的傾向」,「異常を正常の範囲内のことと捉えてしまう錯誤」に陥る傾向があることが知られている（山村 2015)。こうした傾向はどんなに正しい知識，判断を授業で扱ったとしても，学習の効果が得られにくいことが想定される。

対して，発災と被災の過程において直面，遭遇し得る様々な困難や課題自体，つまりバイアスや葛藤，合理的でない言動など（デマ，デマを信じてしまうことなども含む）災害発生時に陥りやすいことが起きることを前提とした防災学習が展開できれば，自他の言動を問い直し，災害に関わる常識を批判的に検討し，困難を避ける手だてを考慮に入れた学習が可能となる。例えば，発災時どのような事態が生じるのかは置かれた状況により千差万別であることに対して，個人間の認識，判断の異なりがあることを取り上げ，議論することができれば,理想的な最善手を打てない状況において,よりよい言動とは何かを問い，翻ってそれを実現するために現代社会において何を解決すべきかを構想する学びを可能とする。よって，自己の在り方を問い直すとともに新たな社会の形成を目ざす主体化としての市民性形成にかかわる開かれた学習が期待できる(ビースタ 2014)。

３．研究の方法

歴史授業では，過去の人物や社会を現代の常識や文脈からのみで選択・判断してしまう問題が生じやすいことが課題である(現在至上主義，ワインバーグ 2017)。災害に関わる歴史的事象を取り上げるのであれば，バイアスや葛藤，合理的でない言動など災害発生時に陥りやすいことに対してよりよく対応する資質･能力の育成を目指した授業が必要である。

これらの条件を満たす第一の要件として発災から被災，復興に関わる一連の状況が市民レベルで探索可能な事例，第二に現代社会においても類似した現象，特に社会の脆弱性を類推させる事例を取り上げることとした。

第一の要件に関係するのは，過去の出来事の説明は記録した時点での価値観を反映させていることに考慮する点である。例えば，関東大震災発生直後に生じた流言が不安を募らせた人々の間に広がっていき，各自で自警団が組織された記録がある(例えば，横浜都市発展記念館・横浜開港資料館 2023)。これらの記録を後世説明しようとすると，流言は避けるべきものといった価値が同時に示されてしまうことが想定される。つまり，後の記録者による説明は個々人の観念や記録を伝えた時点での価値観や常識を前提として解釈や分析が入り込む二次的な資料となる。こうした場合，流言・デマを信じることにどのような課題があるのかを問わなければ「(流言・デマを信じること）はいけないこと，避けるべきもの」として児童・生徒に注入してしまうことに他ならない。したがって，発災時の状況とともに，記憶のされ方・語られ方の特質を考慮することが必要となる。そこで注目するのは被災した当事者が残した同時代（同時間）的な記録や語り（一次資料）である。例えば発災や被災した様子，避難など一連の行動を記録した日記から災害の様子を読み取っていくことで,災害が人々にもたらしたことは何か,感情を伴って把握することが可能となる。感情を伴った読み取りはエンパシーの醸成を伴うだけではなく,直接的被害,流言やデマ,困難な救援活動などの記録を追体験的に読み解くことができよう。そして，災害下における複合的で制御が困難な出来事から発災時における社会の課題を明らかにし，個人の尊重や公正な状況を遠ざけていることは何かが問える。

第二の要件として，取り上げた事象が現代社会に通じるものであるかを類推し，課題があるとすればそれは何か，解決する手立ては何かを分析，考察することが可能かどうかという点である。例えば，流言やデマはいかなる条件において発生し，どう克服された（されなかった）のか，現代でも起き得るものかどうか分析，検討することにより，私たちの社会で流言やデマに対して何を解決するべきなのか，換言すれば現代社会において何を解決すべきかを構想することが可能となろう。

上記二つの要件から一次資料を取り上げ，言動を読み取ること，取り上げた言動を再構築する，つまり語り直し，未来に伝えることを方法とする。例えば過去の出来事としての厄災における語りから「何を伝えたかったのか」を読み解き，個々人が置かれていた状況，ひいては社会の状況を把握，現代社会との異同を捉えていく。そして発災から被災，復興の様子を後世に語り直す活動を通じて，市民として災害とどう向き合っていくのか,「こうあるべき」といった同調，同質であることを制約しない多様な語りの引き受けと関与，将来を見据えた社会の形成（市民性形成）ができよう。

４．研究成果

上記の研究内容・方法に基づき，本研究の成果を以下の 3 点に整理して報告する。

（1）心性・規範の相対化による問題提起と解決を目指す授業の開発

防災に関わる事例に限定せず，偏見や差別といった形で露呈したバイアスに着目し，歴史教育が現代社会への問題提起と解決にかかわる資質，能力の育成にどのように寄与するか，同時に歴史から学ぶことの教育的意義を析出することを目的とした研究を行った。具体的には，①過去と現代との類似性，継続性を見出して学ぶ意味を高め，②個人，社会に

立ち現れたバイアスを見抜き，③規範を問い直す資質能力を育成することに着目した。

①については，学習者が現在主義に陥りやすいことに留意しつつ通時性があるかどうかの判断材料とすることで，過度な現在主義を抑制すること，②では，通俗道徳にかかわる規範を手がかりにして過去のバイアスの実態や影響を現代社会における文脈に位置付け，規範を問い直すことができれば，社会秩序のありようを実感しにくい現代社会においても通底するバイアスを顕在化させ，よりよい社会に向けた価値判断能力の育成が可能となること，③では，バイアスにより陥りやすい点を探索し，自己と社会との関わりをメタ的に捉え規範（社会）との向き合い方を問い直す，さらには自己言及や歴史的意義を導出することにより社会への参加観,期待感の高揚を目指すことが有用であることを明らかにした。

研究を進めていく中で，発災や復興に際し立ち現れた問題の共通点や相違点について追究させることで社会構造の在りようが捉えられ,社会問題の変容について（例えば「語り」の変容）も学びの射程となることを確認した。

（2）災害への対応を語り直し，社会の在り方を提案する授業の開発

関東大震災を事例として，発災後の状況を示した資料や被災状況の記録，日記を手がかりに，語りに関与し受け継ぐのか，語り直すのかを問い，社会の在り方を提案する授業の提案，検討を行った。

災害の発生から復興までを扱う歴史学習の内容選択の原理として,第一に,災害の概要，対策，復興の過程だけではなく，被災時何を見聞きし，何を感じ，どのように行動したのかがわかる資料を用いて災害の状況が市民レベルで語られている災害を対象とした授業を構成した。要点は次の三点である。第一は後の時代の価値観が入り込んでいない一次資料を取り上げ，発災時の状況とともに，記憶のされ方・語られ方から状況を理解していくことである。第二に，災害を事例に発災から復興までの過程において立ち現れる様々な課題を明らかにしていくことにより，課題を克服するには何が必要なのか，現代社会において引き続き解決しなければならない課題は何かを問い，よりよい社会のあり方について構想できる構成とした。第三は，立ち現れた課題を現代，将来へとつなぐ継承者としてどう語りを引き受けるのか，立ち現れた課題に関わる「語り直し」を経ることにより，社会と自己とをつなげて社会の在り方を提案する過程を構想したことである。

意義は以下の点である。第一は発災時の状況とともに，記憶のされ方・語られ方の特質を分析，考察することにより，普段は通用する規範や常識が必ずしも通用しない発災時において，災害が人々にもたらした困難や葛藤を取り上げた授業の方法を提示したことである。第二は，なぜそのような語りをしたのか，原因を探索することにより，現代に適用できる語り，適用できない語りを分析，分類し，意味付ける活動ができる点を明らかにしたことである。第三は，自己の在り方とともに現代社会にも通じる課題は何かを問い，語り直すことの意味を提案できたことである。課題として語りのスケールに着目すると,他所，他の災害でも起き得る個人レベル，せいぜい組織や地域レベルで起き得る課題は見出しやすいものの，国，それ以上のレベルにおける課題は見出しにくいことが明らかとなった。

（3）一次資料（語り）の解釈から社会を捉える授業の開発

一次資料から対立や葛藤を読み取って論争点を明らかにし，調整可能かどうか吟味・判断することを目指した授業を開発した。近代以降，国際関係が目まぐるしい変化に対して一つの出来事を一つの立場から捉えただけでは，グローバルな視点からの判断は困難であ

る。したがって，多面的・多角的に歴史的事象の意味や意義，相互の関連を分析する学習が必要であると考え，小単元「帝国主義と民族独立のバトル」において戦争（厄災）に関わる外交問題を事例とした。

構想した学習は次の 4 段階からなる。第一段階では元老井上馨の語り「欧州の大禍乱（第一次世界大戦は）天佑（天の助け）」を取り上げた。その上で戦争が天の助けとなることはあり得るのか，通時性を問うこととした。次になぜ,「天佑」だと語られる社会であったのか，総力戦の様相，ロシア革命を経て休戦，ベルサイユ条約に至った推移を各国の関係と共に把握し，語りの出所と対象を明らかにしようとした。

第二段階では取り上げた語りに関わり， 第一次世界大戦勃発時に各国で発せられた共時的な語りを分析していく。事例として日本の動向については必ずしも対中強硬派ばかりではないこと（慎重派としての大隈首相の語り，元老山形有朋の語り），中国の立場（ある大臣）からの語り，イギリスの立場（外務次官アーサー・ニコルソン）からの語りを取り上げ，それぞれの語りにおいて何を主張したかったのかを読み取らせようとした。

第三段階では，語られた条件や状況をふまえて語りを意味づけ，理解していくことを想定した。本事例では「それぞれの国はいかなる立場で語ったのか」を問うことで，状況や条件を理解していくことをねらい，置かれた立場を比較して「それぞれの語りにズレあるとすれば何か」を問い，対立や摩擦，葛藤はどこにあるのか，論争点を導き出し解釈していくことを想定した。取り上げた語りの場合，権益の拡大を企図する日本，それを阻止したい中国，自国の権益保護のためには日本の権益を認めつつ，過度の拡張に警戒感をもつイギリスといった利害関係にズレがあり，それぞれが自国の利益を主張して対立していることを理解していくことになる。

第四段階では第三段階で明らかにした論争点について，解決策が導き出せるかどうかを考え，調整が必要であるならばその条件は何かを吟味，判断する段階として位置づけた。例えば，中国の権利がそもそも侵害されていることをふまえ，それが解決できなければ妥協はしづらいこと，日本はドイツの権益だけでなく以前から持っていた満州の権益も拡張しようと考え調整は難しいこと，イギリスは商業上の不利益を被らない限り日本の要求を認める可能性があったことなどを勘案して調整を試みることになる。この段階で重視したいのは，解決策を導き出すことそのものではなく，妥協点，調整の根拠を求めること自体困難であることを追体験することにある。

単元を終えるにあたり，現代社会の視点から語り直す活動を行う。生徒それぞれが歴史を判断し，語りを通して自らも歴史の形成者の一人となって関わっていく（歴史上の語りへの参画）ことで，歴史の内在化を目指した。

本研究の全体をまとめると,バイアスや現在主義を回避しつつ歴史を内在化することが,先人が厄災に立ち向かってきた歴史から最善策を判断，意思決定を導き出し，問題解決できる学習に連なることを提案した。語り直しの学習活動は社会の在り方の構想，提案することに他ならず，歴史上の厄災を学ぶことを通して，これから起き得る被害や影響を説明したり，社会の在り方を議論したりする力を養い，結果社会をよりよくしようとする行動選択，つまりレジリエンスを高めた社会への参画，市民性形成に寄与することを示した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 山内敏男	４．巻 36
２．論文標題 規範の脱構築を目指す歴史授業の開発－中学校歴史的分野「社会変革で現れたバイアスを考える（近代化と通俗道徳）」を事例に－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 社会認識教育学研究	６．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/00029268	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 關浩和，山内敏男，福田喜彦，阪上弘彬他6名	４．巻 33
２．論文標題 未来をデザインする資質・能力形成のための社会科授業開発（Ⅱ）－第６学年単元「世界の中の日本」の場合－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 兵庫教育大学学校教育学研究	６．最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山内敏男
２．発表標題 災害への対応を語り直し，社会の在り方を提案する歴史授業の展開―小単元「市民・社会はいかに災害と向き合うか」を事例に－
３．学会等名 社会系教科教育学会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計5件

１．著者名 全国社会科教育学会，山内敏男共著	４．発行年 2022年
２．出版社 明治図書出版	５．総ページ数 156
３．書名 『優れた社会科授業づくりハンドブック―型にはまらない多様な授業を創る―』「モンゴル襲来に関する「語り」の変遷を捉え,自身の語りを形成する」	

１．著者名 社会系教育実践学研究会，山内敏男共著	４．発行年 2021年
２．出版社 帝国書院	５．総ページ数 225
３．書名 『社会系教育実践学論集－子どもが探究する授業実践を目指して－』「教訓に学ぶ授業の課題と可能性 －民俗学の研究手法を取り入れた歴史学習の展開－」	

１．著者名 梅津正美，山内敏男編著	４．発行年 2023年
２．出版社 明治図書	５．総ページ数 307
３．書名 『板書＆展開例でよくわかる主体的・対話的で深い学びでつくる３６５日の全授業中学校社会歴史的分野』	

１．著者名 關浩和，吉川芳則，河邊昭子編著，山内敏男共著	４．発行年 2024年
２．出版社 風間書房	５．総ページ数 394
３．書名 『レリバンスの構築を目指す令和型学校教育』「災害への対応を語り直し，社会の在り方を提案する中学校歴史授業の展開－小単元「市民・社会はいかに災害と向き合うか」を事例に－」	

１．著者名 土屋武志，白井克尚編著，山内敏男共著	４．発行年 2024年
２．出版社 帝国書院	５．総ページ数 303
３．書名 『グローバル社会における解釈型歴史学習の可能性』「グローバル社会における解釈型歴史学習の方法 －語りを手がかりに－」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関